

ドオル



「彼は確かに狂人でした。けれど私は彼を愛していたのです。だから私は、哀れな彼を許し、彼の悲しみをこの耳で聞き続けたいと思うのです」

ドオル

----人形の君

カフェ店員として毎日を過ごしていた桑原美香にとって唯一の楽しみといえば、たまにくる格好の良い男性客を観察することだった。もうすぐ三十路になろうかという美香は、将来を約束した彼氏がいるわけでもなく、かといって仕事一筋というわけでもない。毎日取り立てて面白くもないし、だから何か楽しいことは無いだろうかといつも模索している。そんな毎日の中で恒例化したのが、客の観察だった。

「ほら、また来てますよ、人形の君。インテリって感じ。結構イケメンだし」

「あんな人が彼氏だったらね」

「狙っちゃえば良いじゃないですか。行け行け、美香さん」

同じウェイトレスの晴美は調子が良く、すぐにそうして盛り上げようとする。あまり積極的ではない美香にとってそれは、半分嬉しく半分疎ましい態度だった。

晴美はまだ二十三歳になったばかりで、顔立ちも仕草も可愛らしいし、結婚前提に付き合っている彼氏もいる。そんな晴美から見れば美香などは「可哀想だから何とか応援してあげなくちゃ」という存在なのだ。

「ムリムリ。私なんて相手にしてもらえないわ」

「そんなあ。やってみなきゃ分からないじゃないですか」

膨れる晴美に笑いかけながら、美香は心の中でひっそり嘆息する。やってみなくては分からない。確かに晴美の言うとおりの。しかし、やってみなくては分からないと言えるだけの勇気さえ美香は持ち合わせていないのである。

「——すみません」

ふいに耳に入った客の声に顔を上げると、そこには例の「人形の君」の姿があった。慌ててテーブルにまで小走りする美香の目には、古めかしい分厚い本が映っている。その表紙には、アンティークな人形の絵が描かれていた。

美香と晴美がその男のことを「人形の君」と呼び始めた契機は正にその本だった。彼はいつもその本を手にして店にやってくるが、その本を開くことはしない。何故いつも十センチはあろうかという厚さの本をわざわざ手にしているのか、そもそもあの本は何なのか。それは二人の間でずっと謎になっており、その謎が「人形の君」をミステリアスな存在に仕立てあげていた。

年の頃は二十代後半だろうか。すらりと高い背、少し長めの黒い髪が切れ長の虹彩の薄い目にかかっている、鼻はすうっと長く伸びている。その顔立ちが既にインテリというイメージなのだが、エスニックさの混じった独特な服装が尚一層そのイメージに磨きをかけていた。少なくともサラリーマンとは思えない風貌である。

彼は何者なのだろう。謎めいていて、興味が沸く。

ずっとそう思ってきた美香にとって、最早その男はただの客ではなくなっていた。退屈凌ぎの観察などではなく、純粹で一直線な興味。恋である。

だからだろうか、その男が店内でプライベートな誘いとしか思えない言葉を発した時、美香はそれに二つ返事をしていた。どこかで個人的にお会いしませんか、というストレートな誘い文句には詳しい場所などは含まれておらず、勿論男の素性は謎のままである。それでも、それは美香にとって拒否という選択肢など存在しないほど嬉しい誘いだった。

退屈な日々が一転、心が弾むような毎日が始まったのはそれからである。男は店にやってくれば美香に微笑み、ちょっとした世間話を振り掛けるようになった。また、店外では紳士な振る舞いで食事やデートを楽しませてくれる。そうして二人が段々と懇意になっていくのは周囲の目にも歴然で、応援していたはずの晴美さえ嘘みたいだと驚いていたほどである。

まさか、こんなに幸せな日々が訪れるなんて。

お洒落にも一層気を遣うようになり、義務でしかなかった出勤でさえ楽しみに思えるようになっていた美香は、男が何者なのか、あの分厚い本は何なのか、そういった当初の疑問をすっかり蒸発させていた。それよりも重要なのは、男とちゃんとした付き合いをすることであり、幸せな毎日を持続させることだったからである。

その願望の前には、真実を突き詰めることなど二の次だったのだ。

その日は、幾度も重ねてきたデートの中でも特別だった。自宅を出る前から身なりやら持ち物やらを入念にチェックしていた美香は、緊張の隠せない表情で目の前の建物に足を踏み入れる。

三階建ての古い建物の前には厳しい門があり、門脇には「来栖野」と書かれた表札がかけられていた。明治か大正にでも建てられたかのような、古き良き時代の和洋折衷が感じられる建物である。中に入ってみてもそのテイストは変わらない。むしろ鼻を突く古びた匂いが、その雰囲気をも助長しているほどだ。

こんな建物が自宅だなんて、やはり彼はどこかの御曹司なのかもしれない。

初めて踏み入れたその自宅に、美香はようやくその思考に行き着いた。そういえば彼は何者なのか、あの本は何なのか。浮かれていてすっかり忘れていた当初の疑問が蘇り、そういえば彼の素性さえ未だに知らないことに気づく。しかし美香の心に渦巻くのは、彼の素性そのものではなく、こんな家に住むような彼にプロポーズでもされたらどうしようかという幸せな心配だけだった。

「今日は家にまで来てもらって悪かったね」

「ううん、大丈夫。それより来栖野さんって随分立派な家に住んでるのね。お屋敷みたいでビックリしたわ」

「最初は皆そう思うみたいだね」

優雅に笑う来栖野の後ろを歩いていた美香が通されたのは、二十畳ほどの広さの応接間である。中央に置かれた大振りなソファを勧められ美香はそっと腰を下ろす。程なくして、その正面に来栖野が腰かけた。

「今日は美香に話したいことがあるんだ。外では話せないことでね」

「それって重要なこと？」

「ああ、そうだ。とても重要な話だよ」

真面目に頷く来栖野に、思わず美香は胸を逸らせる。もしかすると二人の未来についての話なのではないかと思ったからだ。

しかし、そんな美香に突きつけられたのは信じられない言葉だったのである。来栖野の目は真剣で、とても嘘を吐いているようには見えない。

「実はね、俺は愛妻家なんだ。誰よりも妻を愛してる」

——妻？

美香の頭の中は一瞬にして真っ白になった。

まさか予想だにできなかったキーワード。妻どころか恋人がいるという話すら美香は聞いたことがなかった。いや、その前にだったら何故美香とデートを重ねたのか。

単なる浮気だとでも言うのだろうか。そう混乱し始めた美香の前で、来栖野は構わずに淡々と話を続けていく。

「俺はどうも愛しすぎる傾向があってね、いつも物足りなくなってしまう。だから俺はまた新たな恋人を探す。ところがまた同じ過ちを犯す。その繰り返しだ。分かるかい？」

来栖野は俄か苦しそうな表情を見せると、そろそろこの悪循環を止めたいのだと口にした。そして、それを美香に手伝って欲しいと懇願する。

「美香、君は今までの妻達とはまるで違う。君との出会いには運命のようなものを感じるんだ。分かってくれるね？」

「来栖野さん...」

真っ直ぐに自分を見遣る来栖野に、美香はどう答えて良いか分からなかった。来栖野の告白は自分への愛の証明だと分かる。しかし彼には現実に妻がおり、その上で自分に愛を囁いているのだ。しかも来栖野が口にした妻達という言葉は、彼が過去に数人と婚姻関係にあったことを物語っている。これは世間で言う不倫ではないか。その事実に行きついたとき、美香の中に眠っていた魔性が目を覚ました。

「私を一番にしてくれなきゃ嫌」

鋭く言い放った美香の言葉に、来栖野は笑う。そして、頷く。

「私は本気よ。奥さんとは別れて。私と貴方が運命だっていうなら、妻が一番だなんて言わないで。私が一番じゃなきゃ嫌なの」

「良いよ。でも俺は愛妻家だ。つまり君が新たな妻になれば問題はない」

美香の言葉に動揺することなく快諾を返した来栖野は、不思議なほど自然に笑っていた。その表情に美香も思わず安堵して笑顔を浮かべる。美香の心のあったのは、目にしたこともない、つい今しがた知ったばかりの妻という存在への優越感だった。

自分はその女に勝ち、目前の男を勝ち取ったのである。詰まらない日常への逆流などうんざりだし、かといって自分が不倫という劣勢の関係を強いられるなど到底許せるはずもない。

この瞬間に美香は、勝利と将来への希望を手にしたのである。

「分かってもらえて嬉しいよ、美香。これで俺は安心だ」

盲目な美香の目には、来栖野の笑顔は幸せへの切符のように見えていた。

食事にでも行こうという話になり、外をぶらつく。そうして数時間した後、泊まっていくことを勧められた美香は、再度あの大きな建物の中に身を置いていた。

午後十一時ともなると窓の外は暗く、古びた広すぎる建物はどこか不気味な気がして仕方がない。風が強くなったのか、時折窓がガタガタと音を立て、それが妙に美香に恐怖感を植え付けていた。

「此処に住むことになるのかも…」

シャワーを浴び、用意された寝室のベッドに腰掛けていた美香は、広い部屋と高い天井をぐるりと見回しながらそんなことを考えている。近い将来此処に住むことになったら、風の音くらいでビクビクしているわけにはいかない。慣れなくてはならないのだ。

「それにしても遅いな、来栖野さん」

ふと腕時計に目をやると、少し待っていてと言われてからもう三十分も経過している。来栖野は何をしているのだろうか、もしかして仕事でもしているのだろうか。

食事に出かけた際に仕事に話になり、ようやくそこで判明したことがあったが、来栖野は人形作家という珍しい仕事をしている人間だった。文字通り人形を作るプロで、そこにきてようやくあの分厚い人形の本を手にしていただけの理由が美香にも分かったのである。人形の君という渾名も強ち嘘ではなかったらしい。

家を仕事場にしているという話だったから、この家には彼の作品である人形が置かれているだろう。見てみたいと思いそれを口に出してみた美香だったが、仕事のものだからと来栖野には拒否されてしまった。

「…ちょっと歩いてみようかな」

もう一度腕時計に目を遣った美香は、少し考えてから、よし、と決心してベッドを立ち上がる。少しだったら問題ない、十二時にはこの部屋に帰ってこよう。そう決めて、広すぎる建物の中を少し探検してみようと廊下に出た。



廊下は広く長く、びっしりと並んだ窓全てが風でガタガタと揺れている。思わず自分で自分を抱きしめるように腕を掴んだ美香は、廊下の側面に並んだドアを一つ一つ眺めていった。どれも同じようなドアで、特別なことはなさそうである。屋敷のような建物とはいえ自宅なのだから当然だろうか。

歩を進めると突き当たりに二階への階段があり、美香は躊躇いながらも階段を昇っていった。しかし二階も同様、長い廊下と同じようなドアが並んでいるだけである。

「確か三階建てだったよな」

あの厳かな門の前からこの建物を見たとき、確か三階建てだった。それを思い出、美香は三階へ昇ってみようと思ったが、不思議なことに三階への階段がどこにも見当たらない。一階から二階へと続く階段は三階へは続いていないらしいのだ。

「おかしいな」

あの三階へはどうやって進むのだろうか。美香は首を傾げながら、腕時計に目を落とす。まだ然程時間は経っていない。

もしかしたら二階の部屋のどこかに、三階への階段があるのかもしれない。ふと思いついたその考えに、美香は二階にある部屋を一つずつ確認していった。行けないとなると返って意地でも行ってみたくなる。不謹慎より好奇心の方が勝ってしまうのだ。

そんな好奇心に幸運は味方したのだろうか、ある部屋の中に美香は不思議な梯子を発見した。それは丁度、二段ベッドにかけられた梯子のように床から天井にまっすぐにかけており、天井には消防用のものと似た四角い穴がぽっかりと開けられている。

——行ってみよう。

美香はゆっくりと梯子を昇り、とうとう三階へと足を踏み入れた。三階にあるその部屋は、どうやら一階と二階とは随分と異なっているらしい。一階と二階が明るい蛍光灯に包まれているのとは対照的に、黄みを帯びた白熱灯がぼんやりと辺りを照らしているのだ。そして、その白熱灯が明らかにしたものは——人形だった。

「わあ、すごい！」

美香はその光景に思わず声を上げる。

部屋中に所狭しと置かれた人形はどれも精巧な作りをしており、まるで生きている人間のようだ。愛くるしい目、現代を意識した髪型、洗練されたデザインの服。

どれをとっても素晴らしい。人形のことには詳しくない美香でも一目見て分かるほ、それは完璧なのだ。

そんな人形達に感心していた美香の目に、ふいにあるものが入る。来栖野がいつも手にしていたあの分厚い本だ。表紙に人形の絵が描かれている、古めかしい本。

そういえば来栖野は、この本を持ち歩いている割には開くことをしないのだ。

「別に...良いよね。減るわけじゃないし」

美香は自分にそう言い聞かせながら、長らく謎だったその本に手をかけ、ゆっくりとページをめくった。そして、思わず目を見開く。

「な...何なの、これ！」

美香の目に映っていたのは、おびただしい数の写真だった。

しかしそれはただの写真ではない。

人形の写真である。

ずっと本だと思っていたそれは実際にはスクラップブックで、来栖野が写真をスクラップしているものだったのだ。

その写真の数々にはそれぞれ名前がついている。

“三番目の妻・はるか”

“十二番目の妻・あやめ”

“三十八番目の妻・ゆうこ”

妻、妻、妻、妻、妻——そこに写っているのは、彼の愛した「妻」達。

美香は背筋がゾットするのを感じた。尋常じゃない。おかしい。彼は、来栖野は、っている。そうでなければいくら大事な作品であろうと「妻」などとは呼ばないだろう。

此処にいたら危険かもしれない、そう思った時だった。

「——何してるの、美香？」

「ひっ！」

突然背後からかけられた声に、美香は驚いて床に倒れこむ。床から見上げる形になったその姿は、今や愛しい男というより危険人物である。大事そうに人形を手にした来栖野は、驚く美香を無表情に見下ろしていた。

「駄目じゃないか、勝手に見ちゃ」

「ご、ごめんなさい。悪気があったわけじゃないの、でも、それは...」

スクラップブックをパタンと閉じた来栖野は、一步一步美香に近づくと、逃げ道を塞ぐかのように馬乗りになる。そしてその途端、とてつもなく悲しそうな表情をして美香を見つめた。

「美香は俺を不気味だと思うか？俺は多くの妻を愛してきた。ただそれが人間じゃなかっただけの話だ。人間には俺の理想の者がいなかった...だから俺は完璧な人形を愛してきた」

仕方ないことなんだ、分かってくれ。来栖野の声が美香の耳に入り込む。

夢中になった男の顔がすぐそこにあり、勝ち取ったはずの男の体がすぐそこにある。こんなにも望んだはずのその状況は、今、嬉しさによる緊張ではなく恐ろしさによる緊張を美香に与えていた。来栖野の言葉を信じて良いのか分からない。信じたい気持ちはあるものの、恐怖感が拭えないのだ。

そんな美香に、まるで許しを請うかのような来栖野の告白が降り注ぐ。

「正直に言おう。俺は狂人と呼ばれてきた。周囲から理解されず、病院に入れられ...俺は必死で逃げ出した。そして俺はやっと、ちゃんと人間を...美香を愛することができたんだ。言っただろう、運命だって」

「そ、そんな...」

「美香、分かってくれ。俺は美香を愛してるんだ」

来栖野の真剣な眼差しと言葉が、美香をまっすぐに捕らえた。とても嘘とは思えない真剣さは美香の心をぐらつかせる。恐怖感はある。けれどこの真剣な来栖野を信じたい。そんな葛藤の中、美香は目をぐっと瞑った。決意をしなければと思いながら。

「美香、頼む...分かってくれ」

眩きに変った来栖野の声が聞こえる。

「美香、俺にはお前が必要なんだ...」

もし来栖野が本当に狂人であり、今もそのままならば、きつともう既に自分はどうにかなってしまっているのではないか。ふとそんな思考に至った美香は、来栖野を信じようという気持ちを高め、瞑っていた目をはっきりと開けた。

「来栖野さん、私も...」

そう口にした瞬間である。

突然、美香の視界に奇妙なものが映った。人形である。

さっき来栖野が手にしていたあの人形。それが今、美香の眼前にあるのだ。

しかしその人形はよくよく見てみるとどこかがおかしい。何かが足りないのである。先ほど見た完璧な人形達とはどこか違う、確実な足りなさ。一体何が足りないのか、美香がそれに気づいたのは一瞬の後のことだった。

「俺には必要なんだ。お前の形の良い——”耳”がね」

耳が足りないだけで人形は完璧ではなくなる。来栖野の愛する妻は、完璧であらねばならない。耳の無い人形の背後から現れた鋭いナイフは一直線に、驚愕する美香の耳に振りおろされた。

集合住宅に住む買い物帰りの主婦達は、スーパーの袋を片手に井戸端会議に花を咲かせるのが日課だった。その日の話題は専ら近くに建つ病院のことである。精神科と神経科のみを扱う大きな病院なのだが、何でもそこの入院患者が脱走したらしいのだ。幸いすぐに見つかり既に事態は収拾したのだが、主婦たちは未だにその話題に食いついて離れない。

「病院で脱走なんてねえ。何でもほら、隣町にある廃屋にこもってたっていうじゃない」

「ああ、知ってる。あの洋館みたいなやつでしょ」

同じ話を何度か繰り返し、何が起こるか分からないわね、としめる。本当に何でもないただの世間話。しかしその話の出所は誰も未だに知らず、誰もそれを疑問に思うこともなかった。

「それにしても...あ、ちょっと！落とされたわよ！」

ふと脇を通りかかった男が荷物の一部を落とし、それに気付いた主婦の一人が声をかける。呼び止められた男は、笑顔でありがとうと礼を言い去っていった。そのやりとりを見ていた別の主婦がうっとり男の後姿を見遣る。

「良い男ねえ。あと十年若けりゃね」

「でも今の人、人形の本なんか持ってたわよ。ちょっと怖いわよ」

今のご時世何が起こるか分からないとやや真面目に切り返した主婦に、更なる切り替えしがやってきました。

「なによ、脱走するような狂人男じゃなきゃ良いでしょ」

「何言ってんの。脱走したのは男じゃなくて女よ。確か名前は来栖野とか」

「その人、妄想で別人になりきってるんだって。しかもその妄想で自分の耳を切ったって話よ」

「嫌だ、考えただけでも痛いわよ」

顔を顰めてぶるぶると震えるジェスチャーをした主婦に、周りの主婦たちも同意するように頷く。それは彼女らにとって、夕飯支度前の退屈を埋める世間話でしかない話題だった。

「彼は確かに狂人でした。私は今や人形も同然です。誰も信じてくれないでしょうが、私の書いたことは全て事実なのです」

E N D